

のことから、1990年代以降からのSTD流行は、一部の層の無防備な性交にとどまらず、非常に広汎な層の多様な性行動によって拡大したことを示しており、流行は広汎流行期という最終的な流行のステージに入っていると推測される。

なお、男性STD患者の中には、過去1年間の買春経験者が62%存在し、STD感染と売買春の強い関連が示された。これは、我が国では臨床的には比較的よく知られてきた事実ではあるが<sup>8)</sup>、欧米諸国では男性の買春行動はまれであるため<sup>9)</sup>、本研究の成績は欧米では大きな驚きをもって受け止められている。我が国は、STDの流行に関しては、先進国的要素とアジア的要素がミックスした国と特徴づけることができるだろう。

## 2. 最近のSTD流行の動向の変化について

上述のように、我が国のSTD流行は1990年代に拡大したが、図1に示されているように、近年、その動向に変化が生じており、ウイルス性のSTDである性器ヘルペスと尖圭コンジローームは増加傾向が続いている一方で、細菌性のSTDである性器クラミジア感染と淋菌感染症が2002年をピークに減少を始めている。STDによって動向が異なるため、解釈には注意が必要である。理論的には、幾つかの可能性が考えられる。第一は、無防備な性行動の減少(コンドーム使用増加もしくはパートナー数の減少)、第二は、性器クラミジア感染と淋菌感染症の存在率(有病率)の減少、第三は、医療機関への受診率の減少である。

第一については、著者らの2002年以降の研究で、高校生のコンドーム使用率が上昇しつつあることが示唆されているが(未発表データ)、他の年齢層では不明であるうえに、STDの種類によって動向が異なる事実を説明することができない。第二については、近年アジスロマイシンという1回投与で治療する強力なクラミジア治療薬が認可され、かつアジスロマイシンは淋菌感染にもある程度の効果があるため<sup>10)</sup>、社会に流通する菌量が減り、それによって感染機会が減少した可能性がある。第三については、最

近インターネットを介した性器クラミジアや淋菌感染の自己検診キットが普及しつつあり、また治療薬自体もインターネットで入手できることから、これらの疾患に罹患しても、医療機関を受診しない患者が増加している可能性がある。これらのうち、どれが、最近の性器クラミジア感染と淋菌感染症の減少に最も寄与しているかは、断定できないが、第二、第三が理由であれば、必ずしも「安全な性行動の普及」を示すものとは限らないため、単純な楽観論に陥ることなく、様々な角度から情報を収集し、慎重に解釈していく必要がある。

## 3. 他の先進国のSTD/HIV状況

図3は、一部の先進国における1997-2006年にかけての性器クラミジア感染症の動向を示したものである。1997年以降、どの国でもかなりの勢いで、感染者数が増加していることがわかる<sup>3)</sup>。これは、検査法の進歩やスクリーニング検査の普及だけで説明がつく変化ではなく、流行自体の増加が反映していると考えられている<sup>11)</sup>。2008年の3月、米国疾病管理予防センター(CDC)は、確率サンプルを用いた代表性のある調査に基づいて、米国の14-19歳の女性のうち4人に1人(26%)が、ヒトパピローマウイルス(HPV)、クラミジア、淋菌、ヘルペス、トリコモナスのどれか一つに感染しているという結果を発表している<sup>12)</sup>。また最近、英国ではSTDクリニック(genitourinary medicine clinics)の患者データから、STDが1996-2003年の間に倍増し、若い年齢層だけではなく、比較的高い年齢層でも増加し始めたことが報告されている<sup>13)</sup>。このように、先進国では、若者を中心しつつも、広い年齢層で新たなSTDの広がりが生じていることがうかがわれる。

STDだけではなく、先進国では、HIV流行も悪化しつつある。図4は、西ヨーロッパ諸国のHIVとAIDSの報告数の変化をまとめたものである<sup>14)</sup>。AIDS患者報告数や死亡数は、1990年代半ばの多剤併用療法の実現により大きく減少したが、その一方で、AIDS患者の社会的蓄積が進んでいることが示されている。HIV感染者は、

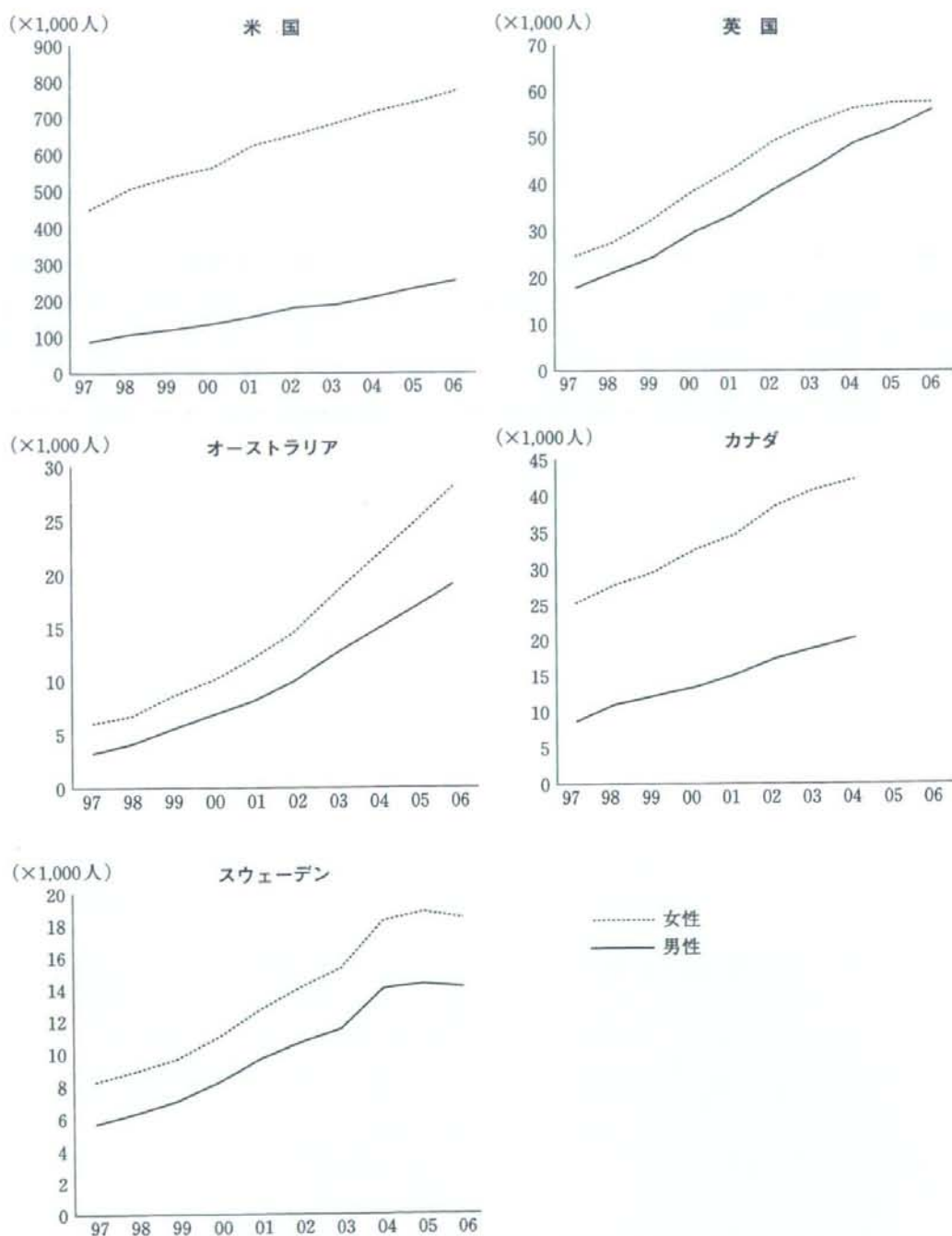


図3 欧米諸国における性器クラミジア感染発症数の動向

2000年までは、ほぼ横ばい状態で、流行は鎮静化したかに見えたが、2000年代に入って様相が変化し、図に示されているように、薬物静注

による感染は低値で安定しているものの、同性間感染と異性間感染が急増を始めている。異性間感染は、移民の感染者の増加が43%を占め

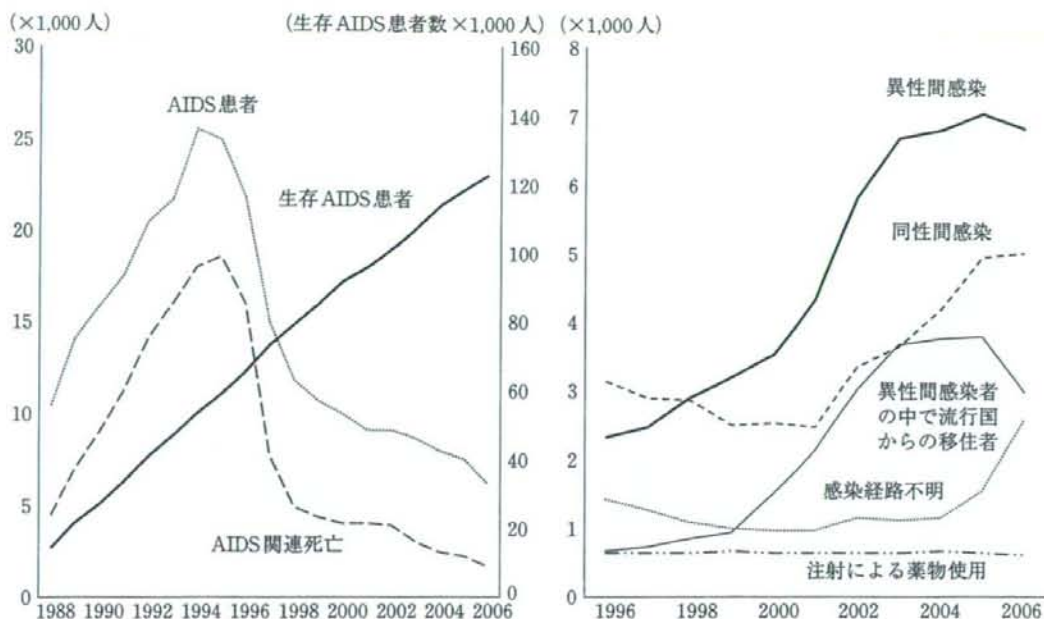


図4 西欧におけるAIDS患者(左), HIV感染者(右)報告数の動向

るが、残りは移民以外における増加である。同性間感染の増加は、特に英国とドイツで大きく、異性間感染の増加は、英国とフランスで大きい。米国では、HIV感染者報告数自体は横ばいであるが、年間少なくとも4万人以上の新規感染者が報告されるという、先進国では飛びぬけた規模の流行が持続しており、蓄積したHIV感染者は、推定120万人にも達し、途上国を含め、世界で8番目にHIV感染者の存在数が多い国となっているのである<sup>13)</sup>。このように、先進国のHIV流行は、無防備な性行動の拡大と感染者の蓄積という2つの問題が進行する、コントロールの難しい流行のステージに入りつつあるように思われる。

### おわりに

以上見てきたように、我が国を含め、多くの先進国で、近年、STD/HIV流行は拡大もしくは再燃し、新たな局面へと入りつつある。しかし、問題の性質は必ずしも同じではない。我が国は、他の先進諸国とは売買春の蔓延という面で大きく異なり、それがSTD/HIV流行に対す

る特有の脆弱性を形成しているが、これは同時にHIV流行の素地ともなる。そのことは、1990年代初期に、多数の東南アジア出身女性感染者が報告された茨城県と長野県における、人口当たりの日本人AIDS患者報告数が、現在全国で2位、3位の位置にあることや、異性間感染に流行するHIV株の分子疫学的研究結果<sup>16)</sup>からも明らかである。最近、我が国の周辺地域(中国、台湾、香港、韓国)では、人口比で我が国を大きく上回るHIV流行が進行し<sup>3)</sup>、台湾では2004年以來、薬物静注者の間で、中国本土由来のHIV株による大きなアウトブレイクが発生しているが、近年の近隣諸国との国際交流の拡大を考えれば、こうした周辺諸国のHIV流行が、1990年代初期のように我が国に影響を与えることは不可避であると思われる。こうした状況認識も踏まえて、STD/HIV対策の普及を急ぐ必要がある。

一方、他の先進国と我が国には、共通の問題が存在する可能性がある。英国の研究からは、インターネットの出会い系サイトの影響が示唆されているが<sup>12)</sup>、我が国の若者の研究でも、携

携帯電話やインターネット使用が性行動と強い関連を有していることが示されてきた<sup>17)</sup>。中国においても、最近、インターネットのアダルトサイトが若者の間に浸透しつつある様子がとらえられているが<sup>18)</sup>、こうしたグローバルな要因が、先進国では既に大きな影響を与えている可能性がある。また、我が国では、現代社会における人間的繋がり希薄化が、性行動に影響を与えている可能性が示唆されているが<sup>9)</sup>、こうした問題が他の先進国ではどのような状況にあり、

かつどのように性行動と関連しているかに興味もたれる。いずれにしても、こうした先進国が同時に経験しつつある問題に対して、その背景の共通点、相違点を明らかにするための国際的情報交流や共同研究の必要性が高まっている。そうしたなかで、それぞれの国に必要な固有の対策と国際的な協調を要する対策が、明らかとなっていくだろう。HIVだけではなく、STDについても、国際的な共同行動が必要な時代を迎えつつあるように思われる。

## ■ 文 献

- 1) 国立感染症研究所感染症情報センター(<http://idsc.nih.go.jp/idwr/ydata/index-j.html>).
- 2) 厚生労働省エイズ動向委員会：平成19年エイズ発生動向年報，2008.
- 3) 厚生労働省 HIV 感染症の動向と影響及び政策のモニタリングに関する研究班：平成19年度報告書（主任研究者：木原正博），2008.
- 4) 東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会：児童・生徒の性 2005年調査，学校図書，2005.
- 5) 木原雅子：10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点，ミネルヴァ書房，2006.
- 6) 木原正博ほか：性的ネットワークと性感染症，日本医事新報 4248：7-12，2005.
- 7) Homma T, et al: Demographic and behavioral characteristics of male sexually transmitted disease patients in Japan: a nationwide case-control study. *Sexually Transmitted Diseases*, 2008. (in press)
- 8) 米田尚生ほか：当院における男子尿道炎患者の臨床的検討，泌尿紀要 51：57-60，2005.
- 9) Hubert M, et al: Sexual behavior and HIV/AIDS in Europe, UCL Press, London, 1998.
- 10) アジスロマイシン高度耐性淋菌—英国，国立感染症研究所病原微生物検出情報 29：166-167，2008.
- 11) Velicko I, et al: Reasons for the sharp increase of genital Chlamydia infections reported in the first months of 2007 in Sweden. *Eurosurveillance* 2007; 12(10): pii=737. (<http://www.eurosurveillance.org/ViewArticle.aspx?ArticleId=737>)
- 12) CDC Press Release at 2008 national STD Prevention Conference, 11 March, 2008. Nationally representative CDC study finds 1 in 4 teenage girls has a sexually transmitted disease.
- 13) Bodley-Tickell AT, et al: Trends in sexually transmitted infections (other than HIV) in older persons: Analysis of data from an enhanced surveillance system. *STI ONLINE* 2008, doi: 10.1136/sti.2007.027847.
- 14) European Centre for the Epidemiological Monitoring of AIDS ([http://www.eurohiv.org/reports/index\\_reports\\_eng.htm](http://www.eurohiv.org/reports/index_reports_eng.htm))
- 15) UNAIDS/WHO. AIDS epidemic update: December 2007. UNAIDS/06.29E.
- 16) 武部 豊：HIV サブタイプと感染経路，治療 88：2843-2851，2006.
- 17) 木原雅子，シャハラザード・M・ラバリ：思春期の性行動と性感染症—問題の構造と展望，小児科 47：1320-1326，2006.
- 18) Ma Q, et al: Sexual behavior and awareness of Chinese university students in transition with implied risk of sexual transmitted diseases and HIV infection: A cross-sectional study. *BMC Public Health* 2006, 6: 232. doi: 10.1186/1471-2458-6-232.

# 健

# 12月号

2008年 VOL. 37-9

## 目次

先生・健康担当者の  
執務必携誌

|                     |   |
|---------------------|---|
| 世界の保健ポスター〈396〉      | 1 |
| 保健の行動化のために          | 2 |
| 北からのひとつこと 南からのひとつこと | 3 |
| 大見 真智子/尾崎 洋一郎       |   |

## 健やかな泉

健康が学校・園・所にあふれるように

|                      |         |
|----------------------|---------|
| 【掲示物】見て楽しい! さわって楽しい! |         |
| 冬の掲示物                | 堀部 美穂 4 |

## Q & A

〈あなたの質問にお答えします〉

|                                    |                  |
|------------------------------------|------------------|
| ■スキーで転倒し、頭を打ったときの対応について<br>教えてください | Q:I・Y/A:酒井 秀樹 8  |
| ■「境界性人格障害」という診断を受けてくる生徒が<br>増えています | Q:M・O/A:衛藤 進吉 11 |

## 特集

【幼稚園・保育園・保育所】

【小学校】 【中学校】 【高等学校】

特集1

平成19年度 文部科学省 体力・運動能力調査報告  
今年の報告では 子どもたちの体力低下に  
歯止めが かかったように見えます  
——その背景にあるもの……

|     |    |
|-----|----|
| ◎解説 | 16 |
| ◎資料 | 20 |

特集2

7割の先生がたが 教材を自作……。  
そこで、全国に広がっている  
若者が社会的にも幸福になれる  
WYSH教育を紹介します! 22

|   |           |
|---|-----------|
| 連載 ●先生の知りたい最新医学がここにある<br>知っていますか? 子どもの近見視力不良 (前編)       | 高橋 ひとみ 29 |
| 連載 ●子どもの自尊感情と共有体験 —「海外」の教育と研究の現場から—①<br>「そばセット」で自尊感情を測る | 近藤 卓 33   |
| 連載 ●養護教諭ってなに?①<br>ちょっと嫌われものの実践研究 (PART-2)               | 岡田 加奈子 36 |
| 連載 ●保護者&保育者 スムーズに連携するためには?<br>保護者との関係を 見直してみる           | 師岡 章 42   |
| 食育を連携の突破口に!   |           |
| 連載 ●保健室★すぐに役立つ! 私のアイデア<br>児童委員会活動 その3                   | 久保 昌子 52  |

7割の先生がたが教材を自作……。そこで、全国に広がっている若者が社会的にも幸福になれるWYSH教育を紹介します！

## 世界と日本におけるHIV流行の最新状況と WYSH教育の現在



京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 准教授・国連合同エイズ計画共同センター センター長  
木原 雅子

国連合同エイズ計画共同センター 研究員  
木原 彩

### はじめに

人類にとって、HIVはこれまでにない難問となっています。1931年にアフリカで誕生したと推定されるこのウイルスは、1980年代に人類にその姿を現して以来、短期間の間に全世界に広がり、死亡者数の面からは、すでに、結核やマラリアを凌ぐ最大の感染症となってしまいました。

昨年の特集でご紹介したように、流行はついに「最後の流行地」である東アジアに及び、中国、台湾、香港、韓国では、すでに日本を大きく上回る流行が生じていることから、日本でも早急に、対策を本格化する必要に迫られています。

本稿では、まずHIV流行の世界的状況について、意外に知られていない先進国の状況を含めた最新の状況を紹介します、そして昨年と同様、WYSH教育の最新の取り組みについて紹介します。

### HIV流行の現状

#### 不透明な世界流行の展望

次ページの図1は、2007年末の推定生存HIV感染者数（3,320万人）と、その世界的分布を示したものです。

昨年ご紹介した2006年末の推定数が3,950万人だったので、減少したように見えますが、これは、

インドやアフリカの一部の国で正確な調査が行なわれた結果、推計値が下方修正されたため、流行開始以来、生存HIV感染者数が増え続けていることに変わりはありません[1]※。

地域としては、アフリカが2,520万人で最大、アジアが480万人でそれに続きますが、2001年からの増加率という観点からは、私たちの住む東アジアは90%と、現在世界で最も流行の勢いが強い地域の一つに数えられています。

2007年の1年間に、全世界で新たに感染した人は250万人、死亡者は210万人と、相変わらず大規模な流行が続いているのです。

しかし流行には、一部に改善も見られます。アフリカの多くの国やインドの一部で、安全な性行動がやや増加し、また母子感染対策が進んだ結果、小児感染が減少しました。

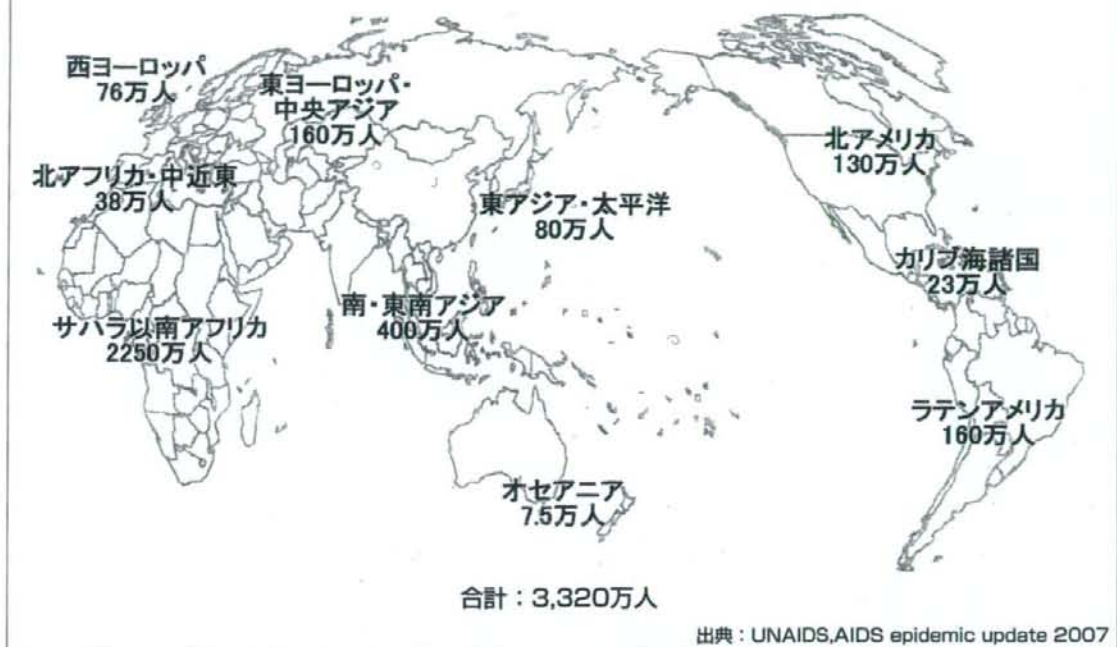
また、一部の抗HIV薬が安価となり、エイズに対する国際的資金援助が本格化したために、2007年には途上国でも300万人の感染者が、ようやく治療を受けられるまでになりました。

しかし、流行が再び悪化してきた国もあり、治療を受けられるようになったといっても、その恩恵に浴している人々はまだごく一部に過ぎず、国際的援助も、今後どこまで拡大するのか、いつまで続くのかは全く不透明です。

現在普及しつつある安価な抗HIV薬にも、いざ耐性が生じることにはなりますが、その場合の対策についても、明確な展望は存在しません。

※ 文中の [ ] 内の数字は、記事の終わりにある参考文献の番号です。

生存HIV感染者（AIDS患者を含む）の世界分布（2007年末）



### 先進国でも状況は悪化

流行の大半は、途上国がその舞台となっていますが、先進国の流行にも、最近憂慮すべき状況が現れつつあります [2] [3]。

その1つは流行の再燃で、もう1つは感染者の蓄積です。西ヨーロッパの国々では、2000年までは流行が抑制され、横ばいの状態が続いてきましたが、その後様相が一変して、急速な同性間感染と異性間感染による流行が始まっています (図2)。

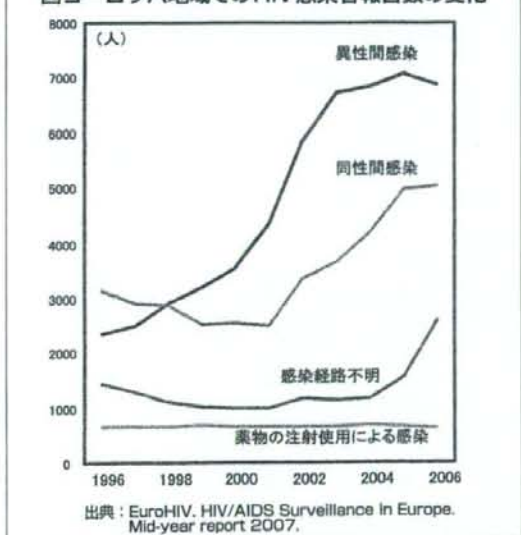
米国では、急増こそしていませんが、毎年56,000人もの人々が感染するという、先進国では破格の流行が継続しているのです。そして、先進国では抗HIV治療が普及しているために、こうした流行の再燃・継続によって、年々生存感染者数が増加するという現象が生じています。

驚くべきことに、米国には、現在120万人ものHIV感染者が生存していると推定されており、その数は、途上国を含めた全世界の国々の中で、

八番目に当たるのです。社会の中での感染者数が増えることによって、流行がさらに促進されるといふ悪循環に陥る危険が懸念されます。

このように、日本よりはるかに対策が進んできた他の先進国でさえ、対応に苦慮しているところに、エイズ問題の難しさが象徴されています。

西ヨーロッパ地域でのHIV感染者報告数の変化



## 地域に広がる日本の流行

日本では、エイズ発生動向調査によって、流行がモニターされていますが、一貫した増加が続き、2007年には、HIV感染者1,082件、AIDS患者418件が報告され、いずれも過去最高を記録しました〔4〕。

他の先進国でも、HIV感染は増加していますが、AIDS患者が増え続けているのは、先進国では日本だけです。他の先進国では、早期発見・治療が進み、HIVに感染してもAIDSを発症せずに済むようになっていきます。しかし日本では、早期発見・治療が進まず、多くの感染者が潜在しているという困った状況にあるのです。

流行は、ほとんどが性感染（同性間感染と異性間感染）であり、年齢別では、30歳未満が約3分の1を占め、日本は特に若い層に偏っていることが知られています。

最近の動向で特に懸念されるのは、地域拡散が進行していることです。報告数が最も多いのは、相変わらず東京都ですが、大阪府や愛知県が東京都の2倍の増加率で迫っており、その他の地域でも、東京都と同じ、もしくはそれを大きく上回る

増加率で増加しつつあります（図3）。

献血血液のHIV抗体陽性率も増加が続き、2007年には10万件あたり2人を超えてしまいましたが、これは、主な先進国の中では日本が最大となっています。この動向からも、日本のHIV流行が進行していることが伺われます。

## WYSH教育の現在

### エビデンスに基づく教育

こうしたHIV流行の進行を食い止める上で、学校における予防教育は特別な意味を持っています。しっかりと予防教育がなされた若者たちが社会に送り出されていけば、社会全体がいずれ変わり、流行を食い止めることができると期待されるからです。

私たちがWYSH (Well-being of Youth in Social Happiness) 教育の推進に力を入れているのはそうした意味があります。その詳細については、「WYSHプロジェクト」のホームページ (<http://www.wysh.jp>) をご覧になってください。WYSH教育は、エビデンスに基づく教育であり、これまで実施した25万件にも及ぶアンケート調査と、何百人の生徒たちへのインタビュー調査や効果評価の結果、そして教育の実践からの経験を織り込みながら、進化してきました。

そうした科学性を評価されて、2004年から厚生労働省の青少年エイズ対策事業、2007年からは、文部科学省の「性の指導に関する実践推進事業」（注：2008年から「性に関する教育」普及推進事業に改称）として、国家的な事業に位置づけられるようになりました。

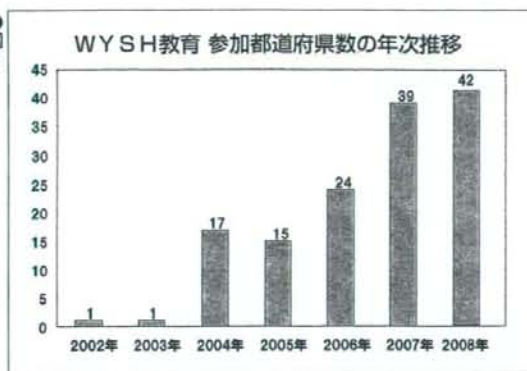
その結果、参加校の都道府県数は、次ページの図4に示すように、2002年の1県2校から、2008年の42都道府県202校にまで増加してきました。

（注：2008年に参加がなかったのは、秋田県、山梨県、栃木県、福岡県、大分県の5県）

大都市圏を含む都道府県の累積HIV/AIDS患者報告数







## 70%の学校が「人の繋がり」教材を自作

2007年度に実施された中学校と高校のWYSH教育は、例年のように、HIVや性感染症関連の知識の大幅な増加、高校生のセックス容認意識の減少、安全な性行動の増加という効果を生み、WYSH教育の効果が改めて確認されました〔5〕。

2007年度の経験で特に印象的なことは、WYSH教育が強調する「人間同士の丁寧なつながりの大切さ」という、メッセージを伝えるためのビデオやパワーポイントを、実に70%の参加校が自ら作成したということでした。

作成には、多少の技術と時間が必要ですが、それを教師同士、教師と生徒の共同作業で作成した学校が多数に上り、その経験自体が、学校内での人間同士の繋がりを強めることになり、生徒も、メッセージを受け止めてくれたという報告が相次ぎました。その中でも、ある盲学校が作成した教材は、参加者全員に特に深い感動を与えました。

WYSH教育が、これまでのエイズ・性教育と大きく違う点は、単なる知識やスキルの提供ではなく、人間関係の回復を目指すことにありますが、その理解が広がっていることを示しています。

### 小学校への展開

#### ～調査を踏まえた人間基礎教育～

2008年度も、8月に京都でWYSH教育の研修

会が実施されました。今年度の研修会は、昨年度までと大きく違う点があります。その第一は、WYSH教育経験校が増えてきたために、新規参加校からの質問には、なるべく経験校が回答するというスタイルで研修が進められ、学校間の経験交流が始まったことです。

第二は、小学校向けのWYSH教育の研修プログラムが開始されたことです（全国42校が参加）これは、初等教育の現場の先生方からの強い要望に応えたもので、中学校、高校対象の場合と同じように、調査結果を踏まえて開発されました。

その調査とは、ある自治体と共同で2006年に実施した調査（7,087人）で、小学生のライフスタイル、人間関係の状態、そして既存の性に関する教育をどのように受け止めているかを調べるために、実施したものです〔6〕。

その結果、小学生時点から、友だち、先生、家族との人間関係が不十分な子どもたちが、少なからず存在することが明らかになりました。一方、従来の性に関する教育については、裸体図の載った教材には4割がネガティブな感情を持ち、4年生男子ではそれが6割に及ぶこと、男女別々の授業を希望する生徒が4～6割で、5年生女子では6割に達することなどが明らかとなりました。

また、「赤ちゃんの誕生」や「命の始まり」に関する、授業内容に対する反応（低・中学年）は4割がポジティブで、ネガティブな反応は少ない結果となりました。しかし一方で「男女の身体の変化」に関する授業内容に対する反応（高学年）は、ポジティブは2割にとどまり、ネガティブな反応が4分の1にも達していました。

さらに、質的データの分析から、低学年では講義内容の消化不良により、様々な誤解が生じていて、それが放置されていることも分かりました。そして、これら小学生の保護者に対する調査（4,866人）も実施したところ、小学校でぜひ教えてほしい内容として「相手を思いやる気持ち」が93%、「自分を大切にしようとする気持ち」が88%、「家

族や周りの人との関わりの大切さ」が84%であるのに対し、「性器の名称」「エイズや性感染症」「性交」については、各々29%、24%、13%と、低率であることが明らかになりました。

こうした調査結果をふまえて、小学校では、WYSH教育が土台と考えている「人間基礎教育」に重点を置くプログラムを作成することとしました。

「人間基礎教育」とは、丁寧な人間関係を築いたり、将来に夢と希望を抱く心を育む教育のことで、家族や周囲の人々と自分の絆の大切さへの気づきや、携帯電話による関係の落とし穴への気づき、大人の仕事の大切さへの気づきを促し、将来に対する夢や希望を醸成する教育のことです。

性に関しては、「体の発達=大人」ではないというメッセージを重視しつつ、誰でも教えられるような、第二次性徴の教育教材の開発を行ないました。これらは、実際の授業で効果を確かめた上で、本年度の研修に取り入れられました。

小学校のWYSH研修も、中学や高校と同じく、自分の学校の現状を事前調査で確認し、実情にあった教育開発支援という内容で設計されています。以下に、本年度の小学校の研修内容を紹介します。

#### 第一部 全国の小学生と各校の現状比較：

##### 「自分の学校の現状を知ろう」

…全国平均と比較して、自分の学校の生徒の現状を評価する（評価シートの作成）。

#### 第二部 WYSH教育の概要：

##### 「WYSH教育っていったいなに？」

…WYSH教育の開発の背景にある科学的理論や方法を学ぶ。

#### 第三部 「性に関する教育：実践例」

…小学生向けに作成された様々な教材（ビデオ、パワーポイント等）や、グループワーク、ホームワークの紹介と使用：実施方法の説明。実際に行なわれた授業の記録ビデオの映写。

#### 第四部 授業開発ワークショップ：

##### 「自分の学校の指導案を作ろう」

…自分の学校の状況にふさわしい授業案の開発と質疑応答。

#### 第五部 総合討議・評価

## 緊急に取り組むべき課題として

最後に、WYSH教育には、文部科学省の事業として、今年から本格的に力を入れていることがあります。それは、伝達講習の推進です。

これは、京都で研修を受けた先生方が地域に帰って、内容を他校の先生方に伝達する講習のことで、それを受けた先生方は、WYSH教育の教材を受け取って授業を行なうことができます。伝達講習を実施する学校が増えれば、WYSH教育は小学生、中学生、高校生の間に、飛躍的に普及していくことでしょう。

最初に述べたように、アジアからのHIV流行の足音がかなり接近してきました。近隣諸国との人の行き来が益々高まりを見せる中、流行はいずれわが国に流れ込むものと思われまます。

学校には、もちろん緊急に取り組むべき様々な問題が溢れていますが、子どもたちが来るべきHIV流行から、適切に身を守ることができるような知識と、人間的土台を築くことの支援は、現在のわが国において、最も緊要の課題の一つだと言っても過言ではありません。

(N・K)

#### 【参考文献】

1. UNAIDS, WHO. AIDS epidemic update. Geneva. December (2007)
2. EuroHIV. HIV/AIDS Surveillance in Europe. Mid-year report (2007) Saint-Maurice: Institut de Veille Sanitaire (2007) No.76.
3. Hall HI, Song R, Rhodes P, et al. Estimation of HIV Incidence in the United States. JAMA (2008) 300:520-9.
4. 厚生労働省エイズ動向委員会 平成19年エイズ発生動向年報 (2008)
5. 木原雅子 平成19年度厚生労働科学研究 「若年者におけるHIV感染症の性感染予防に関する学際的研究」報告書
6. 木原雅子 平成18年度厚生労働科学研究 「若年者におけるHIV感染症の性感染予防に関する学際的研究」報告書

## 思春期の性行動と性感染症

Sexual behavior and sexually transmitted disease among adolescents

診断の指針 治療の指針



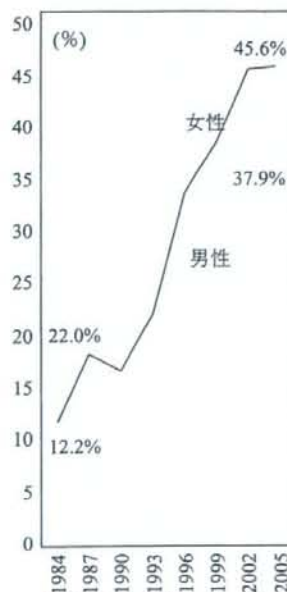
木原 雅子\*2\*4 シャラザド M.ラヴァリ\*1\*3 加藤 秀子\*1\*3  
 ONO-KIHARA Masako Shahrzad M. Ravari KATO Hideo

## はじめに

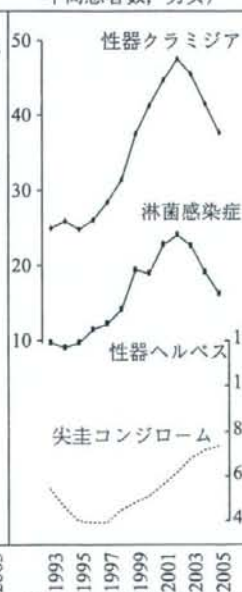
世界的な HIV 流行の時代を迎えた今日、若者の性行動と性感染症 (STD) は特別な意味を持っている。STD は、HIV に対する易感染性を高めることが知られており、性行動→STD→HIV 感染という連鎖が成立しやすいからである。こうした時代にあつて、わが国の思春期の若者の性行動や STD はどのような状況にあるのだろうか。

## 1. 1990年代の変化

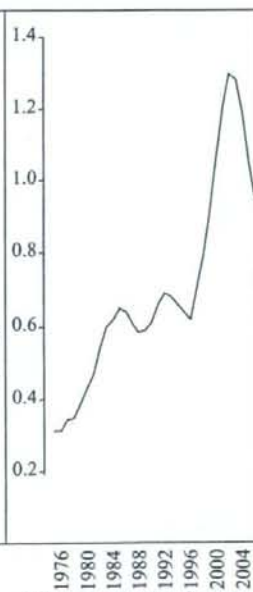
図1は、感染症サーベイランスにおける各種 STD、10代の人工妊娠中絶率、コンドーム国内出荷量の動向を示したものである。1990年代半ばから多くの STD が一斉に増加を始め、人工妊娠中絶率も急増した<sup>1)</sup>。STD は若い年齢層に多い疾患であるため、こうした動向の背景には、若者における性行動の変化がある。図1には、東京都の高校生の性経験率の変化とコンドーム国内出荷量の変化も併せて示したが、1980年代には男子22%、女子12%であった性経験率は、2005年

A. 性経験率  
(東京都, 高校3年生)

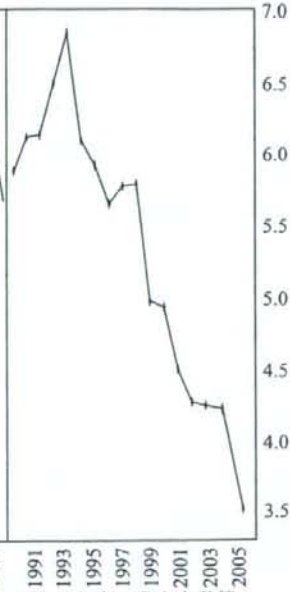
出典：東京都幼・小・中・高・身障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告，2005年度調査

B. 性感染症  
(全国, 定点あたり年間患者数, 男女)

出典：厚生労働省感染症発生動向調査

C. 10代人工妊娠中絶率  
(全国, 人口100人あたり)

出典：母子保健の主なる統計

D. コンドーム国内出荷量  
(全国, 単位億個)

出典：薬事工業生産動態統計

図1 性行動(高校生), 性感染症, 人工妊娠中絶率(10代), コンドーム出荷量の動向

には男子38%、女子46%と性行動の若年化が進み、性行動を行う人口が急速に拡大する一方で、コンドーム国内出荷量が1993年6.3億個から2004年には3.5億個と激減するという状況が示されており、無防備な性行動が大きく拡大したことを強く示唆するものとなっている。われわれが2004年に、全国高等学校PTA連合会と共同で実施した全国高校生性行動調査(1万人調査)からも、①性行動の変化が全国的なものであること、②多数と性交経験を持つ傾向が進んでいること(平均経験数約3名)、③多数経験者ほど無防備であることなど、性行動の実態がさらに詳細に明らかとなり、わが国の若者の間にSTDの流行を促す「性的ネットワーク」が発達している実態が明瞭に示された<sup>2)</sup>。

さらに、われわれが1999年に実施した全国住民調査からは、若い年代層で、口腔性交が著しく蔓延したこと<sup>2)</sup>、そして同調査と全国STD患者調査のデータを用いて行ったケースコントロール研究からは、金銭を介した相手や不特定の相手だけでなく、特定の相手との性行為が、また陰性交だけではなく、口腔性交もSTD感染のリスクを大きく高めることが明らかとなった<sup>3)</sup>。

これらの情報を総合すれば、1990年代は、性行動の低年齢化とネットワーク化が大きく進んだ時代であり、また、口腔性交というほとんど無防備な性交の蔓延が加わることによって、STD感染が、パートナーのタイプを問わないあらゆる性行為の場面に広がるといふ深刻な流行が生じたことがうかがわれる。

## 2. 最近の動向

しかし、21世紀に入ってから、わが国のSTD動向には、変化が現れている。図1に示したように、細菌性STDであるクラミジアや淋菌感染が2002年をピークに減少を始め、10代の人工妊娠中絶率も減少し始めた。しかし、その一方で、ウイルス性STDである性器ヘルペスや尖圭コンジロームは増加が続いており、性経験率の低下やコンドームの国内出荷量の増加も見られない。こうした複雑な現象をどのように理解したらよいであろうか。結論を出すには、時間と情報が必要と思われるが、現時点でいくつかの仮説が可能である。第一は、若者の性的ネットワークがSTDを流行させにくいものになったという可能性、第二は、細菌性STDである性器クラミジアと淋菌感染の存在率 prevalence が減少した可能性、そして第三は、医療機関への受診率の減少である。

第一については、われわれの2002年以降の調査で、高校生のコンドーム使用率の上昇や、多数と関係を持

つ傾向が減少しつつあることが示唆されているが(未発表データ)、STDの種類によって動向が異なる事実を現時点では説明することができない。ただし、潜伏期の違いでウイルス性STDへの影響は遅れて現れる可能性は残っているため今後の経過観察が必要である。第二については、近年アジスロマイシンという1回投与で治療する強力なクラミジア治療薬が認可され、かつ淋菌感染にもある程度の効果があるため、社会に流通する菌量が減り、それによって感染機会が減少した可能性がある。第三については、最近インターネットを介した細菌性STDの自己検診キットが普及しつつあり、また治療薬自体もインターネットで入手できることから、医療機関を受診しない患者が増加している可能性がある。第二、第三の仮説では、細菌性STDが減りウイルス性STDが減らない理由を説明することができる。これらの3つの可能性のうち、どれか、あるいはどの組み合わせが、最近の性器クラミジア感染と淋菌感染症の減少に最も寄与しているかは、現時点では断定できないが、第二、第三が理由であれば、必ずしも「安全な性行動の普及」を示すものとは限らないため、単純な楽観論に陥ることなく、さまざまな角度から情報を収集し、慎重に解釈していく必要がある。

## 最後に

以上、わが国の若者の性行動とSTDについて、その動向について概説し、最近の減少傾向についていくつかの仮説を検討した。現時点ではさまざまな可能性が考えられるが、仮にSTDが真に減少しているとしても、楽観できるわけではない。2005年に行われた調査では、若者のクラミジア感染率が5-10%と報告されており<sup>2)</sup>、まだ高すぎる水準にあることに変わりはないからである。しかも、最近欧米諸国では一斉に、検査の普及だけでは説明できないクラミジアの流行が若者の間に始まっており<sup>5)</sup>、米国では、疾病管理予防センターの調査から、10代の実に4人に1人が何らかのSTDに感染しているとの調査結果が発表されている<sup>5)</sup>。また、最近タイでも、若者の間にクラミジアの流行が確認されるなど<sup>6)</sup>、STD流行は世界流行(パンデミック)の様相を呈し始めてるように見える。加えて、中国、台湾、香港、韓国など、わが国の近隣諸国では、日本の状況を大きく上回るHIV流行が続いており、その影響が早晚わが国に現れる可能性を考えれば、HIVを含めたSTD予防の啓発と教育の一層の拡大が求められる。

## 文 献

- 1) 木原雅子：10代の性行動と日本社会—そして WYSH 教育の視点。ミネルヴァ書房，2006。
- 2) 木原雅子ほか：若者に見られる性行動と STD。性感染症 STD 第 2 版(田中正利編)，南山堂，2008。
- 3) Homma T, Ono-Kihara M, et al: Demographic and behavioral characteristics of male sexually transmitted disease patients in Japan: a nationwide case-control study. Sex Transm Dis 2008 (印刷中)。
- 4) 小野寺昭一：STD の最近の動向。性感染症 STD 第 2 版(田中正利編)，南山堂，2008。
- 5) 木原雅子ほか：性感染症の疫学。日本臨床 2008(印刷中)。
- 6) Whitehead SJ, Leelawiwat W, Jeeyapant S, et al: Increase in sexual risk behavior and prevalence of chlamydia trachomatis among adolescents in northern Thailand. Sex Transm Dis. (2008) [Epub ahead of print]



# 統合失調症をライトに生きる

## 精神科医からのメッセージ

永井書店

著 渡部 和成 八事病院 副院長

定価 1,575円

(本体 1,500円+税5%)

A5判・184頁・図26・表15

ISBN 978-4-8159-1796-8

統合失調症治療を長年行っている著者が、患者さんとご家族が統合失調症という疾患を正しく理解し主体的、積極的に治療に参加していく治療を通して「統合失調症をライトに(軽やかに)生きる」ことの大切さを、著者の統合失調症治療の豊富な臨床例と治療データとともに伝える。

# 特集 性感染症

## V. 背景と対策

# 中学・高校生の性行動の現状と予防 対策—その実態・社会要因とWYSH教育の視点—

木原雅子 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野、国連合同エイズ計画共同センター

### Key Words

中学生  
高校生  
性行動  
人間的つながり  
WYSH教育

### 要 旨

わが国では1990年代以降、若者の性行動に大きな変化が生じ、それに伴い、性感染症、人工妊娠中絶、HIV感染が増加している。近隣諸国のHIV流行が激化するなか、有効な予防対策の確立と普及は急務の課題である。われわれは、膨大なデータと社会疫学的手法に基づいて、有効で、かつわが国の社会文化的文脈に適した予防教育を発達段階に応じた教育体系として確立することに成功し、現在、全国的普及を進めつつある。

### はじめに

1990年代半ば以降、わが国の若者において性感染症（STD）や妊娠中絶が急増した。HIV感染報告にも若者の占める割合が大きく、若者における一層のHIV流行の拡大が懸念されている<sup>1)</sup>。われわれはこれまでに、中学生と高校生を中心に、全国調査を含む24万件の性行動調査と多数の質的調査を行い、また、若者を取り巻くさまざまな関係者に対する調査や交流を通して、若者の性行動の実態とその社会的背景を分析し、それに基づく予防プロジェクトの企画・実践を通して科学的エビデンスを蓄積してきた。

本稿では、そうしたわれわれの理解と実践の到達点、そして夢を紹介する。

### 若者の性行動や性意識の現状

#### 1. 性行動の早期化

東京都性教育研究会の調査によれば、性行動の若年化が進み、高校3年生男女の性経験率は、1990年代半ばに男女逆転し、2005年には40%前後に達した<sup>2)</sup>。また、2004年に社団法人全国高等学校PTA連合会と共同で実施した全国高校生1万人調査（以下、全国高P連調査と略す）の結果では、高校3年生の性経験率は、男子30%、女子39%で、やはり女子が高く、また都会と地方の間に差はみられず、性行動の活発化が全国ではほぼ一律に生じたことが示唆された（図1-A）<sup>3)</sup>。

#### 2. 性的パートナーの多数化

性的パートナー数も変化が大きい。1999年に実施した全国性行動調査（以下、国民性行動調査と略す）では、性経験者における5人以上の

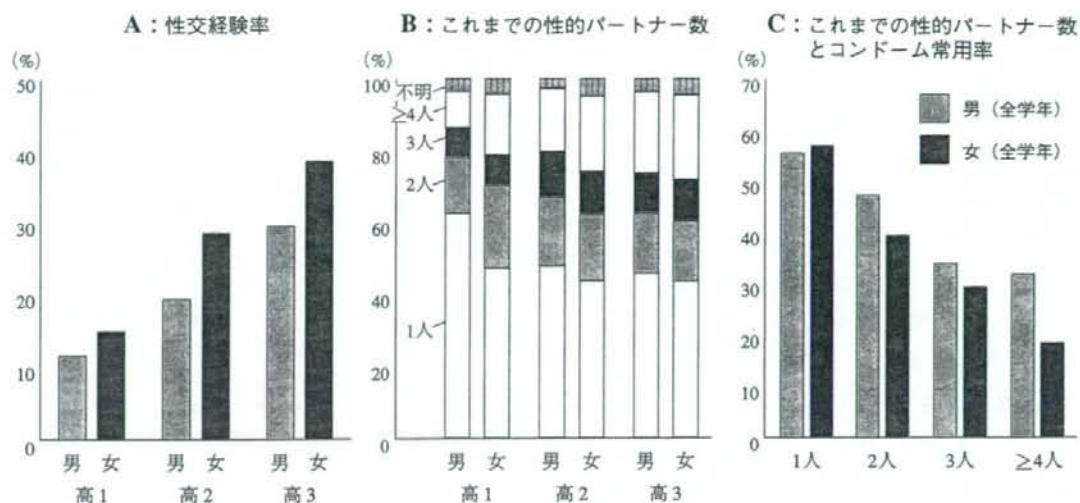


図1 2004年の全国高等学校PTA連合会による全国性行動調査の結果

性的パートナー経験者の割合は、女性では若い年齢層ほどその割合が大きいという結果となり、男性もそのパターンに近く、短期間の間に、若い世代で多数の相手と性関係をもつ傾向が進行したことが示唆された<sup>4)</sup>。全国高P連調査でも、性経験者の平均生涯パートナー数は男女とも約3人で、生涯経験数が1人の人は半数を切り、4人以上経験者が20%にもものぼるという状況が明らかとなった(図1-B)。

### 3. コンドーム使用の実態

1999年に実施した全国国立大学生の性行動調査で、男女とも、性的パートナー経験数の多い層ほどコンドーム常用者の割合が低いことが初めて示された<sup>4)</sup>。その後、同じ傾向は地方の高校生調査でも繰り返し確認された。これは、日本の若者における危機意識の欠如を反映するものと考えられる。2004年の全国高P連調査では、経験数が4人以上の高校生のコンドーム常用率は男子で約30%、女子で20%未満にすぎなかった(図1-C)<sup>4)</sup>。

### 4. 性意識の実態

こうした性行動の背景には、性意識の変化がある。2003年の地方中学生調査<sup>5)</sup>では、中3において性経験率は6~7%であるのに、高校生

の性行為を容認する人は70%に達し、すでに中学生時点で準備状態ができあがっている様子うかがわれた。

以上のデータが示すことは、わが国の若者が、近年、性的に強く刺激され、無防備な性的ネットワークを都会、地方を問わず拡大させてきたという事実である。ネットワーク理論によれば、とくに相手の多い人々を「コア」といい、その行動が無防備な場合にSTDの流行が加速されるが<sup>6)</sup>、わが国の若者はまさにその状態にある。これが、現在、性感染症が若者の間で増加している背景であり、今後のHIV流行の土壌ともなる。

## 性行動問題の社会的構造

### 1. 性情報の氾濫

このような性意識や性行動の変化の背景の一つに、性情報の氾濫がある。2004年の全国高P連調査<sup>3)</sup>では、小学生までに20~30%、中学生までに50~70%がポルノ漫画に曝されており、また2003年の地方中学生調査<sup>5)</sup>では、中1までに70~80%が性行為とは何かを知るに至っていた。しかし、同じ調査で、性器クラミジアを知っていた生徒は10~25%にすぎず、

まともな情報が入らぬまま強い性情報に曝されている現状が伺われた。そして、最近では情報源として、インターネットの比重が増している。2004年の全国高P連調査では、中学生までにアダルトサイトにアクセスした男子の割合は、低学年ほど高く（高1で42%、高2で37%、高3で29%）、インターネットがポルノ情報の新しい媒体として浸透しつつある様子が捉えられており、ポルノ曝露は今後さらに深刻化していくものと思われる。

## 2. 携帯電話など

また、携帯電話の有無と性行為を容認する意識（性意識）・性行動にも明らかな関連がある。たとえば、2003年の地方中学生調査では、携帯電話を有する生徒では有しない生徒に比べ、性意識は1.5～2倍、性経験率は3.5～6倍も高いことが示された。これは、携帯電話が交際の敷居を下げ、意識や行動の活発化につながったと解釈できるデータである。また、携帯電話は出会い系サイトの利用を促し、全国高P連調査では高3男女の約10%に利用経験があった。

## 3. 人間的つながりや生きがい

しかし、そればかりではない。実は、全国高P連調査によれば、性意識や性経験は家族との会話とも強い関係があり、家族とまったく話をしない生徒は、する生徒に比べ、性意識・性経験率は2倍以上も高い。同じ傾向は2003年の地方中学生調査でも得られた。

そのほか、全国高P連調査からは、先生に不公平感を抱いている生徒はそう感じていない生徒に比べて、性意識・性経験率が約2～2.5倍高いという結果が得られ、2005年の中学生調査<sup>7)</sup>でもほぼ同じ結果が得られた。そして、その中学生調査からは、性意識・性経験率が、大切にしてくれる大人がいないと感じている中学生は、いる生徒に比べ2～5倍、毎日の生きがいを感じていない女子は、感じている女子に比べて2～4倍、将来実現したい夢がないと感

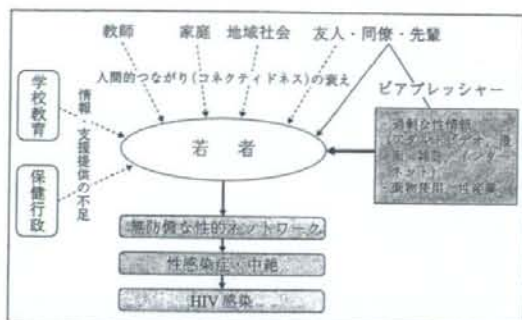


図2 若者の性行動と社会

じている女子は、そうでない女子に比べて1.5倍高いという結果が得られている。とくに女子において、人生の生きがい感が、性意識・行動に影響を与えている可能性がうかがわれた。

## 4. コネクティドネスモデル

以上のデータから示唆されることは、性意識や性行動の変化が、単に過激な性情報の結果という単純な現象ではない可能性があるということである。家族、学校の先生、周囲の大人との人間的つながりや若者同士の人間的つながりの衰え、生きがい感の喪失、そして、携帯電話の出現などが影響を与えているように思われる。

近年、コネクティドネスという概念が国際的に注目を集めている<sup>8)</sup>。これは人間同士の有機的なつながりを意味し、それが衰えた社会では若者の社会帰属感の衰え、疎外感、孤独感、自分が価値ある人間と思えない、飽きやすい、切れやすい、やる気がない、性行動の促進など、さまざまな「症状」が生じるといわれ、日本の状況もまさにこの状態が当てはまる。

これらの現状分析から、図2に示すようなモデルが想定される。真ん中に若者がいる。若者たちは、家族、教師、友達同士、そして地域社会との人間的つながりが衰えた状態に置かれている。人間的つながりには、情報や規範、価値観、心などを伝える働きがあるが、それらが伝わってこない状態におかれている。保健行政、学校教育、マスコミからは、予防に必要な情報は提供されていない。こうした状態にしながら、



若者は強い性情報の風圧に曝されている。これでは、無防備な性行動へと押し流されていくのは自然の成り行きであり、この構造を変えなければ、問題の発生を止めることはむずかしいと考えられる。

## 予防対策のありかたについて

### 1. エビデンスなき予防教育からの脱却

わが国にはこれまで、種々の予防教育が「輸入」されてきた。もちろん試みとして重要であるにしても、残念ながら、わが国における行動変容効果について科学的エビデンスが蓄積されてきた形跡がない。行動は文化現象であり、文化は国や民族によって異なる。個人主義で明示性の高い欧米文化と、集団帰属意識が強く非明示的なわが国の文化では、規範の影響力や伝えかたなどが異なることが予想される。それゆえ、わが国の社会文化環境における効果や影響が確かめられる必要があったのに、それがほとんどなされてこなかったのである。

### 2. WYSH プロジェクト

われわれは2002年以來、WYSHプロジェクト (<http://www.wysh.jp>) を推進してきた<sup>9)</sup>。WYSHとは、Well-being of Youth in Social Happinessの略で、24万件に及ぶ性行動調査やインタビュー調査のデータを基礎に、社会疫学(socio-epidemiology)の手法(疫学、統計、質的方法、ソーシャルマーケティング、行動理論などを統合したもの)を用いて開発してきたものである。高校の教育モデルから出発したが、現在では、小学生、中学生のモデルを開発し、<sup>7)</sup> 発達段階に応じた教育体系がほぼ確立しつつある。

#### 1) WYSHの戦略

WYSHプロジェクトには、いくつかの特徴がある。第一は、科学的方法に基づくことである。若者と若者を取り巻く人々について詳しく調査を行い、それに基づいて社会科学的に予防をデ

ザインし、その効果を評価する。第二は、単なる技術教育ではなく、人生の夢・希望や、人としての生きかたという、より根本的な価値観の中に予防教育を位置づけようとしていることである。WYSHのSH (Social Happiness) にはその意味が込められている。第三は、対策の適切さや持続性を保障するために、固有の役割をふまえた連携、つまり「社会分業」の実現をめざしていることである。学校が外部講師に丸投げする例がみられるが、これは連携ではない。なぜなら、生徒の様子を知らなければ内容が不適切になりやすく、講師によって内容やメッセージが変る可能性があり、そして何よりも持続する保障がないからである。WYSHプロジェクトでは、地域の保健医療関係者、学校関係者、保護者などが、それぞれが自立的に自らの役割をはたしながら、相互の連携を築いていくことをめざしている。

#### 2) WYSHの方法

WYSHプロジェクトの骨格となっているのは、ソーシャルマーケティングである。これは、1990年代から発達した手法で、さまざまな行動(性行動、生活行動、保健行動、環境行動)に応用され、最近急速に注目が高まっている<sup>10)</sup>。

プロジェクトは、大きく形成調査、プログラム開発、実施、効果評価の段階に分れる。形成調査と効果評価には、量的方法(質問票調査)と質的方法(フォーカスグループインタビュー)を用い、効果評価には準実験法が用いられる。プログラム開発はマーケティング概念を基礎として、授業・ゲーム・ビデオ・パワーポイント・パンフレット・ポスターなどを開発し、さらにアトモスフェリクス、プロンプト効果、ブランド効果などのマーケティング技法を応用している。そしてそれ以外に、行動段階モデル、警告受容プロセスモデル、消費者情報処理モデル、情報拡散モデル、フレイレの課題提供型教育などを理論的枠組みとして用いている。

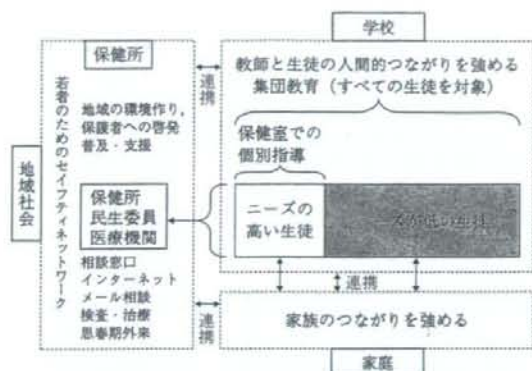


図3 WYSHプロジェクトにおける社会分業モデル

### 3) 社会分業

前述のように、WYSHプロジェクトは「社会分業」を戦略概念としている。図3はそれを表現したものである。生徒の大多数は性経験がない。こうした集団に対しては、一部の経験者だけを対象にした内容ではなく、全員に共通して必要な情報提供を行う必要がある。しかし、それでは一部のニーズの高い生徒には情報が不足するため、保健室で個別的な情報提供や相談を行う。しかし、現実には多数の生徒が訪れ、保健室は狭く、生徒の相談に十分乗れないという事情があることから、WYSHでは、2007年から携帯でアクセスできる性の問題に関するWebサイトを開設し、そのサイトを記したカードを保健室で配布することとした。これによって、養護教諭の仕事に余裕が生まれ、またそれがきっかけとなって、本人や家族が相談に訪れるという効果が生れている。

しかし、リスクの高い生徒が全員保健室を訪れるわけではない。そこで、学外でそうした若者たち（非就学者を含め）を受け止めるネットワークの形成が必要となる。保健所を核として、地域の医療関係者、保護者などが、若者たちを支援する連携体制を作り上げることができれば、若者と地域の大人たちとの人的つながりの回復も期待できるだろう。WYSHの研修を受けた保健所で試みが始まっているが、複雑な課題で

あるため、モデルの開発には、まだ時間がかかるように思われる。

### 4) 集団教育

われわれは自ら授業を行いながら、集団教育モデルの開発に努めてきた。そのモデルは、すでに研修を受けた教師によって10万人近くの中・高生の間で実践され、寝た子を起すことなく、知識・態度・行動変容効果のあることが実証されている<sup>3) 6)</sup>。こうした実績が評価されて、WYSHプロジェクトは、2004年度から厚生労働省の「青少年エイズ対策事業」として支援を受け、2005年に公示された新しいエイズ予防指針の教育部分にはWYSHの理論が採用されることになった。また、2007年からは文部科学書の「性教育の指導に関する実践推進事業」の支援を受けつつ、普及拡大が進められることとなった。

WYSH教育では、対象の行動段階や発達段階に応じて授業内容が異なるが、いずれの場合も送るメッセージは二つあり、第一は、誰にでもリスクがあるということ、第二は、時間をかけて、ていねいな人間関係を築いてほしいというものである。

これらのメッセージを授業に織り込みながら、現在、中・高生を対象とする授業は、以下の構成で行っている。①導入ゲームを行う、②性感感染症・妊娠中絶のリスクが誰にでもあることを伝えるため、パワーポイントとビデオによる講義を行う（リスクパーソナライゼーション）、③あるテーマ（例：理想の恋愛、人生の夢）についてグループワークを行う、④ていねいな人間関係の大切さを伝えるビデオを上映する、⑤感想文を書く、⑥教師からのメッセージを送る、⑦WYSHパンフを配布する。用いるビデオは中学生と高校生で異なり、導入ゲーム、グループワークのテーマは、生徒の発達段階や雰囲気を使い分ける。そして授業では、「…すべき」と生徒に結論を押し付けることはまったく

しない。自分で考えて納得したものでなければ心に残らないからである。コンドーム装着方法の説明は現在行っていない。それは、その有無にかかわらず、等しい行動変容が得られるという私たちが得たエビデンスに基づくものである。

授業の様子を伝えられないのが残念であるが、この授業を通して得られるのは、食い入るようにつめる真剣な生徒たちの眼であり、輝く笑顔である。そうした経験が、研修を受けて実施した教師からも数多く伝えられている。

### おわりに

以上、わが国の若者の性行動について、その現状、背景、展望と、私たちが現在取り組んでいる教育の概要を解説した。

WYSHプロジェクトはまだ進化の途上にあるが、小学校から高校生にいたる発達段階に応じた教材や授業の組み立てはほぼ確立することができた。高リスクの若者たちに対する予防対策にはまだ課題が多いが、WYSHプロジェクトへの支持や関心、また参加希望が、多くの学校、保健所、教育委員会、PTA連合会から寄せられており、こうした動きの中から、理想的な地域モデルを創造する機会が生れてくると信じている。

最後に、WYSH教育は聾学校でも一部取り入れられているが、われわれは、最近、目の不自由な子どもたちへの教材開発を、「WYSH音プロジェクト」として着手した。障害の有無にかかわらず、等しく感染症やHIVから身を守る教育が保証されること、WYSHプロジェクトはその夢を追求し続けたいと思う。

### 文献

- 1) 木原雅子, 木原正博: HIV感染症の疫学—現状と課題. *BIO Clinica* 20:32-28, 2005
- 2) 東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会: 児童・生徒の性 2005年調査. 学校図書, 東京, 2005
- 3) 木原雅子・他: 若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究. 厚生労働省HIV社会疫学研究班平成16年度報告書, 2004
- 4) 木原雅子, 木原正博: 若者の性行動. 性感染症STD, 第2版, 熊澤浄一, 田中正利・編, 87-98, 南山堂, 東京, 2008
- 5) 木原雅子・他: 若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究. 厚生労働省HIV感染症社会疫学研究班平成15年度報告書, 2003
- 6) 木原正博, 木原雅子, Zamani S: 性的ネットワークと性感染症. *日本医事新報* 4248:7-12, 2005
- 7) 木原雅子・他: 若者のHIV/STD関連知識・行動・予防介入に関する研究. 厚生労働省HIV感染症社会疫学研究班平成17年度報告書, 2005
- 8) Resnick MD et al.: Protecting adolescents from harm. Findings from the National Longitudinal Study on Adolescent Health. *JAMA* 278:823-832, 1997
- 9) 木原雅子: 10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点. ミネルヴァ書房, 京都, 2006
- 10) Andreasen AR: Marketing social change. Jossey-Bass, San Francisco, 1995

### 著者連絡先

〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町  
 京都大学大学院医学研究科社会  
 健康医学系専攻社会疫学分野  
 木原雅子

## 初等教育における WYSH教育の可能性について



京都大学大学院准教授 木原 雅子

WYSH (Wellbeing of Youth in Social

Happiness) 教育を始めて五年が経過しました。WYSH教育とは、エイズや性感染症の予防教育から出発して、人間基礎教育を基盤とする「性に関する教育」へと進展してきた教育です。これまで、中等教育と高等教育を舞台に展開してきましたが、幸い、現場からの幅広い支持が得られ、二〇〇四年からは、厚生労働省の青少年エイズ対策事業、二〇〇七年からは、文部科学省の「性教育の指導に関する実践推進事業」を通して、全国的普及が本格化することになりました。

本稿では、WYSH教育が誕生した背景とその概要を紹介するとともに、初等教育における今後のWYSH教育の可能性を展望してみたいと思います。

### 一 性行動から コネクティッドネスモデルへ

WYSH教育の誕生は、私たちが行ってきた性行動研究がその背景となつていきます。今から一〇年前に、私たちがエイズに関する研究を始めたとき、まず着手したの